

吉原治良作品調査についての報告書

大阪新美術館建設準備室 外部研修生

山本 法子

■目的

この度の吉原治良作品調査の主要な目的は、作品の状態を把握するとともに、修復の必要な作品を選定する事である。

作品として完成度の高く、かつ優先的に修復する必要のないものについては、展示可能な作品として分類し、今後の展覧会等に出品する。作品の完成度は高いが、状態の悪化が予想されるものについては、調書に状態を記載し優先的に修復する。また、完成度が低い習作等については、状態が悪くても修復の優先順位は低くなる。

作品の修復は、作品の劣化を防ぎ、作品本来の美しさを維持する上で必須である。それは資料の保存という目的だけでなく、鑑賞者が作品の劣化に気を取られることなく鑑賞する為にも必要な工程である。吉原治良については作品数が膨大であり、修復が終わっておらず一般公開されていない作品も数多く存在する。収蔵庫内に保管されているこれらの作品を調査し修復する事で、展覧会が充実し、人々により多くの吉原治良の作品を知ってもらう事ができる。従って、修復の必要な作品を選定する作品調査は、博物館が生涯教育機関としての役割を果たす上で重要な業務であると言える。

■研修日程

8月4, 5, 6, 12, 14日 13:30~17:00

■調査作品

吉原治良油彩作品 43点

■研修を通して学んだ事

私が今回の研修を通して強く感じた事は、吉原治良という大家の人間としての側面である。私は以前から吉原治良の抽象絵画作品に関心があり、具体美術協会の企画展で作品を鑑賞した事があった。しかし、こうした表に出ている作品は画家にとってのハイライトの部分であり、それ以外の習作は取り上げられない事が多く、来館者は画家の一部分しか知る事ができない。

今回の実習では、倉庫に保存され展覧会に出ていない習作を数多く鑑賞する事ができ、吉原治良という画家が有名な後期の円の作風に行き着くまでに、かなりの試行錯誤を重ねていることがわかった。習作の中には、途中で描く事を止めてしまったものも多数存在したが、その実験の軌跡からは、吉原治良が具体美術協会の中で提唱した「人と同じ事をするな」を自らに課し、苦悩しながらも独自の表現を模索するストイックな姿勢を感じる事

ができた。このような創作の背景に当たる部分は、企画展だけではなかなか掴む事ができないので、習作を多数鑑賞出来たことは大変貴重な経験であった。

また、学芸員業務という側面において学んだ事は、資料調査には当然であるが、かなりの専門的知識が必要であるという事である。というのは、作品修理の優先順位を決定する場合に、一つの作品を他のものと相対化して修理する価値があるかどうかを決定しなければならないからである。例えば、作品に描かれているモチーフが作品群の中でも特異であれば、研究や鑑賞の価値のあるものであると見なされる。また作家内の作品展開だけでなく、同時代の様々な芸術についても造詣を深めその関連性に注意しなければならない。

また、作品の調査は地味であると思われがちであるが、作品一つ一つとの出会いに驚きがあり、大変興味深く面白い仕事であると実感できた。

■研修の感想

今回の研修は、私にとって学芸員の仕事を体験する貴重な機会となるとともに、吉原治良という大家の様々な作品に触れる事できる有意義な時間となったと感じている。

吉原治良は、私の教授が抽象表現主義の専門家であることもあって、授業で幾度となく取り扱われてきた画家であり、その活動拠点が兵庫県であったという点においても大変馴染み深い存在である。しかし、今回実習で取り扱ったほどの作品点数はこれまで鑑賞した事がなかったので、また新しい吉原治良の側面を知る事ができたと実感している。

また、幾何学的図像を描いた彼の作品は、私自身の創作の傾向と近い部分もあり、創作活動という側面において大変参考になった。特に吉原の絵具の扱い方、乗せ方については大変影響を受けた。

今回の研修は、数ある学芸員の仕事の一部分であるが、学芸員の研究職の側面を実感できるよい機会であったと思う。保存されている全ての資料を等価に見なすのではなく、作品の本価を見定め、資料を公開するか否かを判断するという経験は、個人ではなかなかできることではないと思う。この研修で得た視座を自分の研究にも生かすことで、研究対象の真価について理論的に述べられるようにしたい。

■作品調査報告

調査した作品 43 点のうち、優先的に修復が必要であると思われる 10 点について報告する。

1. 「作品」(7—105)

(1960-61ca.?, 油彩・カンヴァス, 53.4×45.7cm, 額寸 74.0×66.0×36cm)

- ・ 右上角と右下角に大きな剥落があり、口が開いている。上辺に渡ってやや剥落がある。
- ・ 釘が錆びている。
- ・ 額は劣化しており、面裸である。額の左下角は触ると剥がれる位に剥落している。額の右側上部には汚れが見られる。
- ・ 額裏については、上下をキャンバスと額をガムテープで止めて固定しており、対応の必要がある。

【表】全画面



【表・部分】剥落



【裏】



【表・部分】



2. 「作品」(7-130)

(1960-53ca., 油彩・カンヴァス, 38.1×45.7cm, 額寸 39.2×46.8×27.0cm)

- ・画面全体に亀裂があり、特に上辺に多い。口が開き、山なりになっている箇所がある。

【表】全画面



【表・部分】剥落



【裏】



3. 「作品」(6-23)

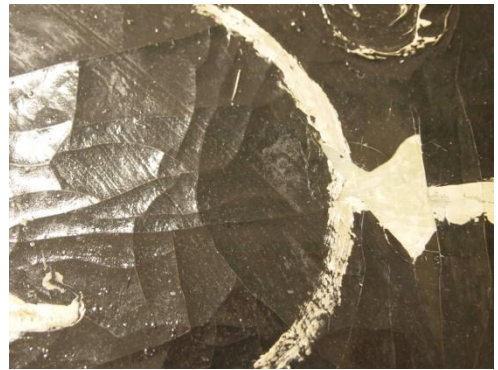
(1952, 油彩・カンヴァス, 33.3×45.5cm, 額寸 34.8×47.3×30.0cm)

- ・画面全体に亀裂がある。カンヴァスから浮いて口の開いているものもある。
- ・全体にホコリが少々堆積している。

【表】全画面



【表・部分】亀裂



【裏】



【表・部分】亀裂



4. 「作品」(A-197)

(1955ca, 油彩・カルトンボード, 24.3×33.6cm)

- ・画面前面に多数の剥落。
- ・画面四周に汚れがある。

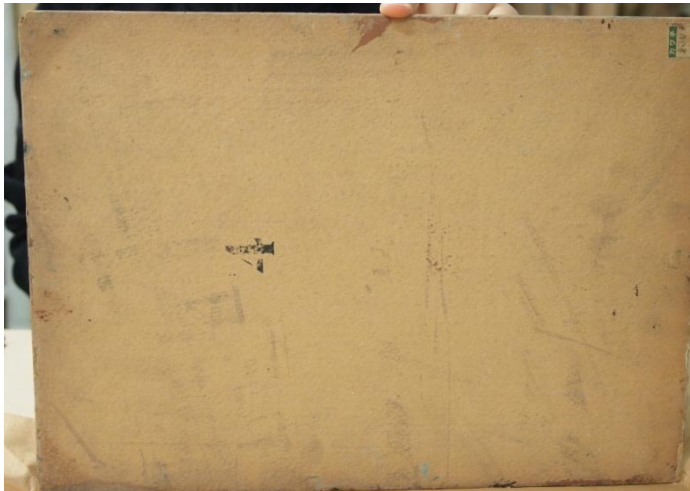
【表・全画面】



【表・部分】剥落



【裏】



5. 「籠の魚菜」(1-8)

(1928ca., 油彩・カンヴァス, 53.2×65.3cm)

- ・右側面に剥落が多く、細かく剥がれ落ちている。
- ・カンヴァスから絵具が浮いている所も多くある。

【表】全画面



【表・部分】剥落



【裏】



【表・部分】絵具浮き



6. 「作品」 (3—8)

(1935ca., 油彩・カンヴァス, 116.8×91.0cm, 額寸 119.0×93.0×53.0cm)

- ・全体的に黄ばみがあり、筋のような黒い汚れがいくつもある。
- ・カンヴァスの張りが悪く、たわんでいる。張り直しの必要あり。
- ・額はカンヴァスに合っておらず隙間ができており、額右辺には白い汚れが見られる。

【表】全画面



【表・部分】汚れ



【裏】下部汚れ



7. 「人」(5—24)

(1950, 油彩・カンヴァス, 53.0×45.0cm)

- ・画面全面に亀裂があり、口は開いていないが山のようになっている。
- ・上部辺に剥落がある。
- ・木枠の中央の部分が浮いている。

【表】全画面



【表・部分】 亀裂



【裏】



【表・部分】 剥落



8. 「巻貝」 (2—32)

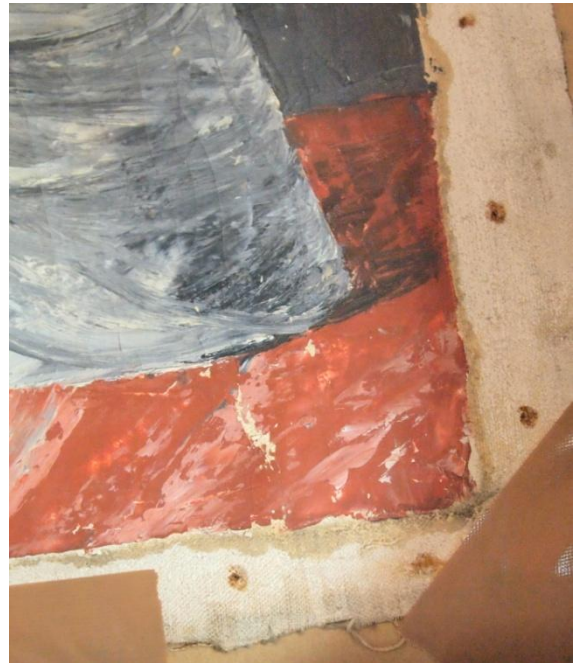
(1933ca.?, 油彩・カンヴァス, 33.3×24.0cm)

- ・メクリ。
- ・縦方向に複数の亀裂があり、四つ角が少し剥落している。

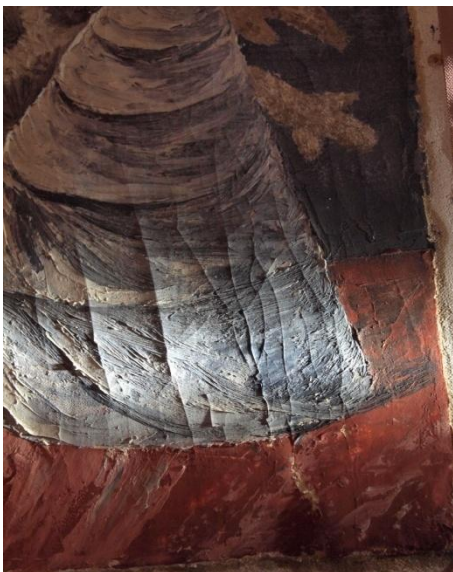
【表】全画面



【表・部分】



【表・部分】亀裂



9. 「作品」(A—232) ※両面画
(1953ca., 油彩・板, 31.0×40.5cm)

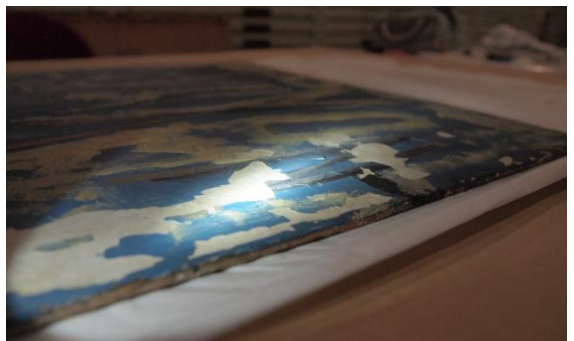
【表】・左辺に大きな剥落、亀裂が多数ある。剥落片は損失。

【裏】・左辺にやや剥落がある。

【表】 全画面



【表・部分】 剥落



【裏】 剥落



10. 「作品」 (7—17)

(1963ca.?, 油彩・カンヴァス, 162.3×130.5cm)

- ・上辺と中央に剥落がある。

【表】全画面



【表・部分】剥落



【表・部分】亀裂



【裏】

